メモリワールドオンライン　ＳＳ

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリワールドオンライン　ＳＳ

【Ｎコード】

Ｎ７３３７Ｚ

【作者名】

左リュウ

【あらすじ】

メモリワールドオンラインの短編集です。

本編では描かれなかったエピソードを収録していきます。

漆黒の銃撃手エピソード０　前編

世界初のＶＲＭＭＯゲーム「メモリワールドオンライン」。
業界内でも世界トップと称されるゲーム会社、クリエーション社が開発したＶＲＭＭＯゲーム。
テストユーザー達はまだ見ぬ仮想世界への扉を開いた。
その先にあったのは――――、

デスゲームという名の、地獄の世界だった。

□□□

この仮想世界、「メモリワールドオンライン」のスタート地点は、特にこれと言った名称の無い、「町」がスタート地点となっており、その「町」は東西南北４つの門がある。
そしてその４つの門からそれぞれの方向へと門をくぐると、「北の広原」、「南の高原」、「東の高原」、「西の高原」へとそれぞれ向かう事が出来る。
そして、その中の一つ、「北の高原」のエリアの奥の方に、とある一つのダンジョンがあった。
じゃり。
と、足を数センチ動かしただけで足場の砂が音を立てる。
乱れている呼吸を整える為に、どうにかして自分を落ち着かせよ

うと試みる。

（落ち着け・・・・・・）

落ち着け、と。

それは「この一件」に巻き込まれてから何度も自分に言い聞かせてきた言葉だ。

落ち着かなければ。平静を欠けば、待つのは恐らく、死。

仮想世界の物とは思えないぐらいにリアルな重量感と、ひんやりとした感触を確かめつつ、その手の中にある漆黒のハンドガンを握る。

物陰からそっ、と、敵を確認する。確認を終えると、側に居る、もう一人の男性プレイヤーとアイコンタクトをかわす。

ここに来るまでに何度も共に戦闘を経験した仲なので、既にもうアイコンタクトぐらいの事は出来るようになっている。

そして、手に持っているハンドガン、「漆黒の銃（ブラックトリガー）」をぎゅっ、と握り締め、そして彼、照井嶺浩、いや、この世界では、「Ｔｒｉｇｇｅｒ」という名の銃撃手は、決意をした瞳をすると同時に、動き出した。

行動を共にしている「フリント」と共に、ダンジョン内へと一気に、潜入する。

そしてその約3秒後。

戦闘が、始まった。

プレイヤー同士の、命をかけた戦闘が。

そもそも。
何故、嶺浩がフリントと呼ばれるプレイヤーと共に、「北の高原」の奥にあるダンジョンで、それも「プレイヤー同士」での戦闘を行っているのかというと。
まず、それは嶺浩がログインを始めた直後。
ゲームの下調べをかねて町の中をうろついていた事から始まる。
ある程度情報を収集した嶺浩は、集合場所である「中央広場」に戻ろうとした道中、二人の少年達と出会う事となった。
それが、後に「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」という通り名までつけられるようになったプレイヤー、「Ｔｒｉｇｇｅｒ」、こと、嶺浩と、後に大規模ＰＴギルドとなる、「銃撃集」のリーダー、フリントとの出会いと、そしてある少年との別れの話である。

□□□

仮想世界、「メモリワールドオンライン」にログインした嶺浩は、とりあえずは共にゲームをプレイしようと約束した者達との待ち合わせ前に、少しばかり情報収集をしようとし、行動を起こした。
元々、ＭＭＯＲＰＧゲームでも自分の独断行動が多すぎて、トラブルになり、結局は孤立してしまった事等も過去にはあったので、今回は軽めに済ますつもりだった。
ログイン後１０分ほどで情報収集を終えると、嶺浩はさっきの「中央広場」へと向かい始めた。

距離的には近く、徒歩でならもう5分ぐらいで着く距離だ。走れば、今の能力値だと2分という所だろう。
そして走り始めようとしたその瞬間、

「あのー・・・・・・」

気の弱そうな声が、嶺浩の耳の中に飛び込んできた。
嶺浩はきょろきょろと周囲を見渡し、どうやらその気弱そうな声が自分に向けられていると思ったので、その声のした方向へと目を走らせる。
そこに居たのは、二人の少年のプレイヤーだった。
どちらも装備は、嶺浩と同じく、「銃」だ。

「俺、か？」
「は、はい」

声をかけてきたのは、まさに声と同じく気弱そうな、小柄の少年だった。少し、おびえたような表情で嶺浩を見ている。
そして、その側に居る少年は、そんなに目だった特徴こそ無いものの、とても優しさを感じる少年だぅった。

「何か、用か？」

まさか、こんな事になるとはな、と内心思う。
こんなＶＲＭＭＯなんていう新たなジャンルの、全く新しいゲームの中で、ログインして１０分ちょっとでいきなり知らない人に声をかけられるとは全く思っていなかった。

「ええーっと、その・・・・・・、ぼ、僕達、これからモンスターを倒しに行くのですが・・・・・・。その、貴方も、『銃撃手』で

すよね？」
「まあ、そうだな。装備を見れば解ると思うが」
「実は僕達、同じ『銃撃手』のプレイヤーを探していたのです。このタイプにするプレイヤー、見た所あまり居ませんので」

実際。
気の弱そうな少年に代わって説明した、この少年の言っている事は正しい。
銃撃手、とはその名の通り、銃を使う職種（タイプ）のプレイヤーの事だ。
ログイン画面ではまず武器を選択し、そしてその武器に応じた職種（タイプ）が確定する。
嶺浩が銃を選んだ理由は、現実世界でも射撃の大会に出たりしているので、実際に銃を手にとって扱う機会が多く、射撃を得意としているからだ。
この仮想世界、「メモリワールドオンライン」はプレイヤー自身が実際に、本当の意味で体感するＶＲＭＭＯゲーム。
銃を手に取った事の無いプレイヤー達が他にも数ある武器の中で無意識的に銃を選ばなくても、無理は無い。まず、「どうやって扱うのか？」、「扱い方が解らない」というような意識が先行するからだ（実際にはゲーム内で運動プログラムのアシストが入るのだが）。

「それで、同じ『銃撃手』のプレイヤーさんと組んで、一緒に銃の扱い方を学んでいこうかとおもいまして。それに一緒に情報の共有も出来るので」
「ふむ・・・・・・」

情報の共有。
それは、嶺浩にとってもありがたい事だ。
今、現時点の状態ではまだ大した情報は無いだろうが、同じ職種（タイプ）

のプレイヤーと一緒に武器の扱い方を学べるのは大きなメリットだし、それに互いに扱い方やコツを教えあえばプラスになるだろう。
だが・・・・・・。

「悪いな。俺は先客が――――、」
「お、お願いします！」
「うおっ！？」

気の弱そうな少年の方にこれ以上無いというぐらいに頭を下げられてしまった。
結局、断りきれなかった嶺浩は少しだけ、その二人組に付き合う事になったのだ。

「そういえば、お前等のユーザーネームは？　ああ、俺は因みに『Ｔｒｉｇｇｅｒ』だ」
「ぼ、僕は、『チロック』です」
「僕は『フリント』です」

気弱そうな方の少年、チロックは「ありがとうございます」と再度、ペコリと頭を下げた。

□□□

とりあえず。
手始めにフィールドに出てみる事にした。ここで銃の扱い方を学んで起きたかったからだ。

まずは、モンスターを確認する。そして銃口を目標（モンスター）に向ける。すると、視界にカーソル画面のような物が現れ、目標（モンスター）にカーソルを合わせるとロックする事が出来る。
後は、そのカーソルに合わせて引き金を引けば、ロックした所に銃弾が飛んでいく仕組みとなっている。
頭の中にはこういった行動等が、勝手に頭の中に流れ込んでくる。この「メモリワールドオンライン」のシステムサポートがあるからなのだろう。
嶺浩は大体、銃のコツを掴んだ。

（それにしても・・・・・・）

チラリ、と嶺浩は共にモンスター狩りをしているフリント、チロックの二人を見る。
二人は対照的だった。
極端な程に。

フリントは、元から何かの理由でモデルガンなり射撃大会なりなんなりと銃を扱った事があるのか、とても手馴れた様子だった。
対してチロックは、まるで敵モンスターに銃弾が当たらなかった。カーソルを合わせようとしているのは、照準が定まっている様子は無かった。

そして数時間後。
一度「町」に戻ろうとフリントが提案し、結局「町」へと戻る事となった。

「はあ。やっぱり僕、ゲームの中でさえダメなのかな」
「そんな事無いよ。最後の方なんか、イイ線言ってたし」

ここ数時間の間、フリントとチロック。二人を見ていて嶺浩は、なんとなく現実世界でも知り合いなんだな、と思った。

「あ。そうだ。僕、ちょっと宿探してくるから、二人はここで待ってて」

「解った」

それじゃ、と言い残して、フリントは南門の前から「中央広場」の方へと姿を消した。となると、嶺浩とチロックはポツン、と残されてしまう形となる。

「あの・・・・・・・なんか、すみませんでした」

「ん？　あ、いや。そんなに気にするな」

実際に。

このチロックはかなり落ち込んでいる。

やはりさっきのプレイングの事だろう。

「はあ。・・・・・・・・僕、やっぱり仮想世界でも、駄目なのかな・・・・・・」

「・・・・・・・『仮想世界でも』？」

これは、現実世界の事は聞いてはならない事だと思ってはいるのだが、なんとなく、この、今の状況だけは、聞いた方が良いと思っていた。

「うん。僕とフリントは、現実世界でも、友達なんだ。だけど僕は現実世界でも、何をやっても駄目だった。役立たず、って呼ばれてたよ。フリントは逆に、なんでも出来た。いつも僕を助けてくれて、

支えてくれた。だから僕、憧れていたんだ。フリントに。けどある日、この『メモリワールドオンライン』のクローズベータテストのテストユーザーに当選した時、決めたんだ。・・・・・・せめて仮想世界では、僕がフリントを助けよう、って。でも・・・・・・、結果的には、助けられている。フリントと君の足を、引っ張っている」

「・・・・・・」

確かに。

今日一日のチロックを見て、お世辞にも「助けている」とは言えない。

だが、

「それで？　今日一日上手くいかなかったからってなんだ。今日、上手くいかなかったのなら、練習すればいいだけだろ。そもそもこれはゲームだぜ？　もう少し楽しめよ。肩の力抜けよ。ゲームの世界なんだから、まずはお前が楽しめなきゃ、何も出来ないぞ」

そう。

これは、あくまでも、ゲームなのだ。

各々それぞれ、ゲームの楽しみ方があるだろう。だがしかし、このチロックはまるでゲームを楽しんでいる様子は無かった。

今日一日、彼はずっと、焦っているようだった。

ゲームとは、楽しむ物。

楽しめなければ、意味が無い。

「楽しむ、か・・・・・・うん。そうだね」

「ああ。そうだ」

今日、初めて、チロックの肩から、力が抜けたような気がした。
そうして二人を少しゆったりとした空気が流れた後、

「おーい！　大変だ！」

それは、起こった。

□□□

「ログアウト、不能・・・・・・？」

嶺浩はフリントからの説明を聞いて、驚愕を露にした。
あわててメモリブレスレットのメニュー画面を開く。そしてあると信じていた「ログアウト」の文字を探す。
しかしそれは、無かった。

「どういう事だ・・・・・・」
「解らない。一度僕が『中央広場』に言ってみると人(プレイヤー)が集まっていたから何だろうと思って近づいてみると、クリエーション社からログアウト不能の知らせがあって・・・・・・それで、その次にこんなメッセージが届いたんだ」

フリントはメモリブレスレットを操作し、掲示板からインストールしたであろうデータを嶺浩とチロックの二人に送信する。

クリエーション社からのお知らせ

・この世界は、仮想空間だが、君達の体は仮想ではない。

・この世界での死は、現実での死となる。

・ＨＰは、自分の命と同様だ。

・ログアウトをするには、ある条件を満たすしかない。

・プレイヤー同士の戦闘も可能だ。

・記憶を使い、クリアを目指せ。

「なんだよこりゃ・・・・・・」

「し、死、って死ぬって事、なのかな・・・・・・」

チロックが怯えたような声を上げる。

「だと、僕は、思うけど・・・・・・」

「それにしても、俺達の体が仮想じゃ無いってどういう事だ？　モンスターからダメージを喰らっても血なんか出なかったし、ただＨＰのバーが減っただけだ」

「そうだよね。もしかしたら、僕達の体は今、ゲーム上のデータか何かに変換されてゲームの中に入り込んでるとか、精神だけが仮想世界に入って体はそのままとか」

「ま、未知の技術について語っても仕方が無い、か」

そこで嶺浩はふと、翔太郎達の事を考える。

（あいつ等、大丈夫か・・・・・・？）

とりあえずその後は、一度宿に向かおうという事になった。
夜はモンスターが強くなり、危険な為、夜にフィールドには出ないようにと約束をし、一度休んだ後日。
三人は情報収集を開始した。
この世界を生きるにおいて、まず必要なのは情報だった。
情報が無い状態で行動をしていると、突発的な自体に陥った時に対応が難しく、何よりこれからこの世界で過ごす上で、どうやって生きていけば良いのかという事も知っておかなければならないのだ。

「それにしても、大変な事に、なっちゃったね・・・・・・」
「・・・・・・そうだな」

これじゃあ楽しむどころじゃないな、なんて事は、言えなかった。
いくらＶＲＭＭＯという全く新しいジャンルのゲームだとしても、あくまでもゲームはただのゲームだ、という認識が、心の奥底であった。
だがしかし、それがアッサリと覆されてしまった。

「一部では、精神がかなり不安定になった人も居る、っていう噂だしね」
「そりゃそうだろうな。俺達も今だって少しばかり不安定なぐらいだしな」

とりあえず嶺浩は心の中で翔太郎達と合流しておきたいという気

があったのだが、なかなかそれを実行に移せないでいた。
そもそも、あの二人が今現在、何処に居るのかも解らないのだ。

三人は情報収集を終えると、とりあえず装備を整える事にした。
普通の店では出費が大きいので、どこかプレイヤーが経営する鍛冶屋のような物でも探してみる事にしたのだ。

「どこか無いかな？　ひっそりと佇む鍛冶屋みたいなの」
「あれば良いんだけどな。そこの路地裏にでも入ってみようぜ」

嶺浩の中にはこういう所に安くて腕の良い鍛冶屋がある、というイメージがあったので、とりあえず入ってみる、そして奥に進んでいくと、「武器工房イザナミ」という看板が見えた。
そもそも、プレイヤーがこの時点で鍛冶屋を経営している事はほとんど無く（ゲーム開始後の時間があまり経っていない為）、それだけでも驚きなのだが、もっと驚くべき事は、その鍛冶屋を営んでいたのが女性プレイヤーだった事だ。

「・・・・・・まさか本当にあるとはな」
「やっぱり自信、無かったんだ・・・・・・」

しかしいつまでもそこで立ち止まっているワケにもいかないので、とりあえずは一歩ずつ歩を進める。

「ん？　何か私に用か？」
「あ、ああ。ここ、鍛冶屋、だよな？」
「そうだが」
「俺達に――――、」
「解った」
「早っ！？　まだほとんど何も言ってないけど！？」

「いや、だってここに来るとしたら武器を作ってくれ、だろ？　耐久値を回復させるだけならこんな所まで来る必要無いし」
「そ、そうだが・・・・・・」
「今作れる最高の武器を作ってやる。だから有り金全部よこせや」
「どこのヤンキーだお前は！？　・・・・・・・・いや、武器を作ってくれる分、それとはまた少し違うか・・・・・・」

正直、有り金を全て取られるのは本来の目的とは違っていて戸惑ってしまったのだが、このイザナミと名乗る少女の武器の製造過程にとても魅かれる物があったので、それを承諾した。

□□□

イザナミの武器の製造方法は、「使用するプレイヤーに合った武器を作る」という目的の為、使用するプレイヤーの戦闘スタイルを把握する必要がある。
よって、三人はイザナミを加えてフィールドに出た。
最初、嶺浩はイザナミは戦闘ではどんな動きをするのかと心配したのだが、どうやら彼女は現実世界でも何かをやっていたのか、とても華麗な動きでモンスターとの戦闘を行っていた。
しかもレベルは三人よりも、高い。
そして嶺浩が更に驚いたのは、チロックだ。
明らかに、しかしまだ不安定なのだが、昨日よりも数段動きが良くなっていた。
「す、凄いよチロック！　一体どうしたの！？」

フリントが、驚きの声をあげていた。実際、嶺浩にも驚きがあった。

（ま、まさか、ここまで上達するとはな・・・・・・まあ、ゲームと楽しんでいる、ワケでも無いようだが――そもそも楽しめるような状況じゃないが――、なんていうか、肩の荷が下りた、って感じだな）

そしてすぐ後に鍛冶屋に戻り、それぞれ武器と素材をイザナミに預け、鍛冶屋を後にした。武器はどうやら明日になるそうなので、とりあえず宿に戻る事にする三人。

武器は、装備が無い状態では心保たないので、イザナミに武器の選び方を教えてもらい、武器屋でそれぞれ初期装備よりも一段階上の銃を買った。

金が足りなくなったので、イザナミにはとりあえず借金をする事になった。しかし、現在持っているこの武器を売ればなんとかなるだろうと、嶺浩は思った。

そして今後のためにもとモンスターを狩って、レベル上げに没頭した。こんな状況下では、そうする以外には道は無かった。

生き残る為に。

数時間続けてモンスターと戦い、気がつけば日が暮れようとしていた。

仮想世界の夕日が、沈もうとしている。

「・・・・・・帰るか」

ポツリ、と、嶺浩は呟き。
三人は宿へと帰った。
嶺浩の頭の片隅では、二人の少年と少女がちらついている。

□□□

夜。
三人は、宿で同じ部屋を一緒にとっている。三人一緒にする方が安いからだ。
本当は今日はモンスターを狩り続けて資金自体は沢山あったのだが、元々同じ部屋をとっており、今更変更するのもどうかと思ったので、結局三人は同じ部屋に泊まった。

故に。

嶺浩は気がついたのだ。
部屋に居るべき人間が2人、居ない事に。

「・・・・・・？」

眠気眼をこすり、じっ、と部屋全体を、二段ベッドの上から見渡す。
向かいにあるベッドの一階には本来、チロックが居るハズなのだが、そこにチロックの姿は無く、その上の段のベッドにはフリントの姿も無かった。

「どこに行ったんだ・・・・・・・？」

嶺浩がその疑問を口にした途端、部屋のドアが開いた。
外から部屋の中に入ってきたのは、フリントだ。

「フリント・・・・・・お前、何処に、」
「チロックが居ないから、探していたんだ」
「何？」

てっきり嶺浩はフリントと居る物だと思っていたので、驚きを隠せないでいた。

「・・・・・・俺も探す」

嶺浩はさっ、とベッドから降りると、寝巻きから通常の服に着替え、装備を確認してそのまま部屋を出る。
フリントは「町」の中なら大体探した、とは言っている。
つまり、

「残る可能性は・・・・・・フィールド、か」
「うん・・・・・・でも、あんまり考えたくないね」

夜になるとモンスターの強さが変わる。
動きもいつもより1．5倍程俊敏になるし、ハッキリ言って危険だ。
少なくとも、今のレベルでは。
それでいてもらえる経験値は変わらないので、夜に出歩くプレイヤーは少ない。

「とりあえず、行ってみるか」

嶺浩とフリントは、夜の町を駆け出した。

□□□

引き金を引く。
弾丸が、放たれる。
それは的確にモンスターに命中し、モンスターのＨＰを０にする。
その弾丸を放ったプレイヤー――――、チロックはふう、とため息をつく。

「今日はここまでにしようかな。疲れたし」

彼は昨日の晩も、ここに来ていた。
その理由としては、「練習」をする為だ。
夜にフィールドに出てモンスターを倒す。
それはチロックの「練習」であり、そして今ではそれが日課となりつつあった。
チロックはフリントや嶺浩について行く為に、ここで一人で、「練習」をしているのだった。
実際、今日もたった一日の特訓の成果も出ていた。
夜になって強くなるモンスターを相手にしていると、昼間に出てくるモンスター相手では夜よりもモンスターの強さが低い分、戦いやすかった。

（僕も・・・・・・強くなれるのかな・・・・・・役に、立てるの

かな・・・・・・この世界なら）

ふと、そんな事を思う。

「・・・・・・あと、もう少しだけモンスターを倒したら帰ろう」

自分にそう言い聞かせて、再び銃を握る。

チロックはこの時、気がつかなかった。

背後から、ある一人のプレイヤーが近づいてきていた事を。

そしてそのプレイヤーは手に短刀を持っており、チロックを狙っていた事を。

短刀が、チロックの無防備な背中に、振るわれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7337z/

メモリワールドオンライン　ＳＳ

2011年12月24日11時48分発行